
聖剣の守護者

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖剣の守護者

【Nコード】

N93450

【作者名】

碧

【あらすじ】

アリアは名門と言われるマーベラス家の令嬢だが家の家計は火の車。あるのは古い屋敷と名ばかりの名誉。生活のために庭を耕し動物を育てるたくましい天然娘（通称ぼけぼけ令嬢）の元にある日叔父から縁談が舞い込む。その縁談が眠っていたアリアの役割を目覚めさせた。

一章 1 (前書き)

初投稿です。よろしくお願ひします。

一章 1

我は汝の剣

汝は我の主

汝が我が主ならばその資格を示せ

一章

アリア・マーベラス。18歳。黒い髪と青い瞳を持つマーベラス家の令嬢はおっとりとした顔に似合いののほほんとした性格をしており一年前の両親の葬儀以来顔も見せなかつた叔父が持ってきた縁談話も「あら、まあ」と呟くに留まつた。

「突然ですのね」

のほほんとお茶を飲む姪に叔父は大きく出た腹を震わせながらアリアをせついた。

「アリア。お前の両親が亡くなって一年。喪も明けたんだそろそろお前自身、身の振り方を考えるべきだ」

「はあくでも、私一応お庭でお野菜を作ってますしお父様の残してくれたニワトリと牛とヤギがいますしお料理とかの家事はお母様にしっかり教え込まれましたから一人でも生きていけますよ」

とても貴族の娘とは思えない発言を庭から聞こえてくる動物の鳴き声と窓の外に広がる見事な畑が肯定していた。

そんな姪に叔父は嘆かわしいと頭をふった。

「名門マーベラス家の娘が何をしているのだ!!」

「日々の食べ物と赤裸々な生活模様ですが？」

「もういい!!とにかく!!この縁談は進めるからそのつもりでいるように!!」

それだけ言ってブリプリと帰っていく叔父の太った後ろ姿を見送りながらアリアは「はて？」と首を傾げた。

「あら？結局縁談をお受けしないといけないのかしら？」

ぼやぼやとそんなことを呟いた二ヶ月後には婚約成立になってしまったのだがアリアはやはりあらまあって済まし婚約者の顔はおるか名前も知らないまま暢気に畑仕事にせいをだしていた。

あれよあれよと婚約が決まったアリアだったが花嫁修業のひとつでもしているかといえはそうではなく。

「ふう〜。暑いですね〜」

夏の炎天下、完璧な農作業スタイルでせつせと畑の草を抜いていた。

首にかけてタオルで汗を拭い腰を叩く様はまさに農家のおばちゃん。

とても貴族の・・・いや、年頃娘には見えない。

だが当の本人は土に汚れるのも構わずに嬉しそうに畑の世話をしていた。

「茄子に胡瓜〜おいしく育ってくださいね〜」

父が存命中に根付かせ東の国の野菜たちに話しかけながらアリアはプチプチと慣れた様子で草を抜き野菜についた虫をばいばいと取っていく。

「よいしょ・・・ふう〜今日はこの辺りでいいでしょう」

雑草もなく虫も取り払った畑に水やり終えたアリアは水を反射させキラキラと輝く濃い紫と緑の実をしゃがみ込むとウツトリと眺めた。

「ふふ・・・収穫まで後数日ね〜。半分は市場で売るとして〜残りの野菜で何を作りましょうか？」

色々レシピを思い浮かべながらウキウキとアリアは道具を片付ける。彼女の心は早くも新鮮な野菜達を美味しく食することに飛んでおり、ほわほわした顔がいつも以上に緩んでいた。

「ふふ……ふふふ〜〜！」

いつも以上に周囲に気を配っていなかったアリアはだから気付かなかった。

「おい」

「お野菜お野菜。美味しいお野菜早く食べたいなあ〜」

「おい！」

「漬物・サラダ・スープ」

「おい！いい加減に気付けこのボケボケ令嬢！」

久しく聞いてなかったあだ名と共にアリアは腕を強く掴まれた。

一章 3

強く腕を掴まれたアリアはそのままその腕の中に引き込まれていた。たくましい腕彼女の背に回される。

小柄なアリアはすっぽりと抱き込まれていた。

「あら？」

何が起きたのか把握しきれなかったらしいアリアの口から緊張感のかけらもない声が出た。

「お客様ですか？」続いて飛び出したのはかなりボケた質問である。間違っても見知らぬ不法侵入している男に抱きしめられながら言う台詞ではない。

「噂に違わぬぼけぼけ令嬢だな」

アリアを抱きしめたまま男が呆れたように呟いた。

「あの？」

困惑するアリアの気配を感じたのか男の腕が少し緩む。

ようやく顔をあげれたアリアは男の姿を認識することができた。

アリアの青い瞳と男の金の瞳が合う。

美しい男だった。銀の髪に金の瞳を持つ男はまるで獅子のような風格を漂わせていた。

一度見たら忘れられない人物である。すなわちアリアとは初対面であること確実である。

平凡な容姿の持ち主であるアリアの人生の中でこのような美形と知り合いになつた覚えがなかったのだ。

一章 4

「アリア。お茶」

「は、はい。わかりました」

朝食の席で新聞を読みながらお茶を要求する青年に「少々待ってくださいね」とアリアは準備に動く。どうみても青年がこの屋敷の主のように思えるが彼らがいるのはマーベラスの屋敷で主はアリアだ。

「お待たせしました」

「ん、ありがとう」

紅茶を受け取ると青年は新聞を読みながらも芳醇な香を漂わす紅茶を美味そうに口に運んでいた。

そんな青年をアリアはなんだか不思議な心境で見つめた。

青年の名はサイキ・ログバル。マーベラス家とは真逆の金も地位も権力もある真正正銘の大貴族の次男でありなんと驚き、アリアの縁談の相手であった。

あの初対面の時、彼はアリアに「俺はお前の生涯の伴侶だ」と告げ、己の名と身分を明かし、そして「結婚前にお互いのことをもっと良く知るため」となぜだかアリアの屋敷にすっかり居座ってしまったのだ。

彼が屋敷に居座り二日が過ぎようとしているがアリア本人の生活に変化はない。相変わらず畑や動物の世話に家事三昧だ。

普通なら何かしら動揺や戸惑いがあるはずなのだが……リアは。

「まあ、でも生活費二人分の捻出は難しいかも？」

「安心しろ。金は家計にいれる。」

「本当ですか？助かります」

家計にお金さえ入れれば彼女に否はないらしい。そうしてこの奇妙な共同生活が始まったのである。

一章 5 (前書き)

前半と後半の雰囲気はかなり違います。

痛い

凶刃に切り捨てられた幼子はその小さな身体を己が流した赤に染めながらただ痛みと恐怖を感じていた。

こわい

朦朧とする意識の中で迫りくる死に気付かない幼子。血に染まった幼子はそのまま誰にも知られることなくひっそりとその命を終わらせるはずだった。

幼子がただの子供だったなら。

「お前が当代の……か。」

宿命、運命というにはあまりにも過酷な鎖に幼子は囚われる。

「憐れだな。お前が主を見出ださぬことを俺ですら願うぞ。見出だし血の定める役割を受け入れればその瞬間にもお前の」

声は何を言っているのかよく、理解できない。だけど引いていく痛みと引き替えに重く頑強な何かに己の全てが搦めとられたのがわかり、幼子は涙を零した。

「あの？ログバル様？」

「名前で呼べ」

「サイキ様？」

「様はいらん。呼び捨てでいい」

「呼び捨てですか・・・」

基本丁寧語に人名にも「様」か「さん」づけのエリアにはサイキの要求は実行するにはハードルが少々高い。

だが実行せねば目の前の青年は納得してくれそうにない。なのでエリアはあっさりと呼び捨てを受け入れた。元々柔軟過ぎるぐらい物事を受け入れる性質のエリアだ。さほどごねることなく彼の要望を受け入れた。

「えっと、それではサイキと呼ばせてもらいますね？」

戸惑うように名前を呼ぶとほんの少しだけサイキは動きを止めた。

「ああ、それでいい」

素っ気ない返事。そして何故かその視線は明後日の方向に向けられていた。そんなサイキの態度に首を傾げるエリア。だが彼女はすぐに不思議がるのをやめ、朝食の片付けを再開した。

彼女にとってサイキのことより家事やら野菜の世話の方が優先度が高かったらしい。

一章 5 (後書き)

アリアの中では野菜や動物の方がサイキより数段上にランクインして
ます。 サイキ憐れな。

サイキと暮らし始めて五日が過ぎようとしていた。これといって二人の間に問題は起きておらずアリアは何時ものように畑や動物の世話や家事をこなしていた。サイキの方も仕事があるらしく客室でよく書類と睨み合っていた。

まるつきり主人と使用人のような生活だがサイキがアリアの畑仕事を手伝ったり逆にアリアがサイキにお茶などの差し入れがてら雑用を手伝ったりと破天荒な始まりだった二人の共同生活は意外なほど良好なものになりつつあった。

が、そんなのほんとしたある意味アリアそのもののような生活はあっさりと崩されることになる。

そう、嵐はサイキの部下である長身の美女の姿でやってきた。

「あなたがサイキ様の婚約者？」

来客のベルに気付き玄関の扉を開けた途端、長身の軍服を纏うとんでもない美女に上から下まで見られた揚句なぜだか鼻で笑われた。

「勝ったわ」

女性は小さく握りこぶしを作ってそう呟くとスタイルを誇示するかのように胸を張った。

「失礼しました。わたくしサイキ様の部下のエリアノ・ラビスと申します。サイキ様にはとも……と~~~~~っても良くして

「頂いておりますの」

「あら、そうですね？仲がいいのは良いことですわ」

ニコニコと朗らかに笑うアリア。彼女にしてみればただただ言葉通りに受け取ったからこそその返答だったのだが疚しい気持ち満載な人間はその笑顔にありもしない裏を呼んでしまう。

（な、なによこの余裕は……はっ！あたしなんか敵じゃないってこと！）

この日この時この瞬間……サイキを廻る女の闘い（ただし一方通行かつ空回り）が勃発した。

アリアは静かに窓から差し込んでくる月明かりを窓際に寄せた椅子から静かに見ていた。

微かに聞こえてくる風の音以外は静かだった。月明かりに照らされるその横顔はいつものボケボケした様子が嘘のように神秘的な雰囲気纏っていた。

揺らぐ陽炎のような儂さを感じさせるアリア。ただ、静かに月を見つめる彼女が何を考えているのか窺うことはできない。

「……………」

ぽつりと零れた言葉は自分にさえ届かぬほど小さくまるで抜けない棘のように胸の奥に刺さっていた。

マーベラス家は名門と言われるが実際の所、ずいぶん昔から没落した一族だ。遙か昔から課せられた役目を全うし切れず、かけがえのない存在を失った一族。

貴族に名を残されたのはせめてもの温情とかすかな希望のため。権力も財力も大幅に削られた一族は徐々に衰退していき、その数を減らし、現在確認される一族はアリア一人だけ。

それゆえに彼女に課せられたものは重く大きい。

血を繋げること。

それがきつとかけがえのない存在をなくした一族に周囲が望むこと。

初代から続くこの血を残すこと。それは希望と同義だったから。

今はもう、一握りの者達しか知らない事実。

叔父は知らない。アリアの血が婚姻が管理されていることに彼は気づいていない。

だから、国が不要と判断したのならサイキとの婚約とて破談にさせられる。

父と母の姿を思い出す。幸せそうな夫婦だった。貴族としても一族としても珍しい恋愛結婚だった二人。

全力でアリアを愛してくれたがその一方で一族に纏わる柵についても包み隠さずに伝えた。
重い柵に悩むこともある。

だけど。

「生きているのだから前を向かなければいけませんわね」

言葉の前向きさとは裏腹に月光に照らされた横顔は諦めを多分に含んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9345o/>

聖剣の守護者

2011年11月2日01時06分発行